

英語「書く力」(ライティング能力)の向上

和田 忍

我々日本人にとって、英語で「書く」ということは簡単なことではない。しかし、「書く」ことが難しいのは何も英語に限ってというわけではない。近年、携帯メールやツイッターといった「会話体」のことはそのままつづってコミュニケーションをとる機会が増えている中で、「文書」としてのことは、つまり「書き言葉」の需要がまったくなくなったわけではない。たとえば、日本語で書く場合でも、お世話になった恩師といった目上の人に手紙を出す際には、文面や表現において相手に対して失礼のないように気を配って書くであろう。また、授業に関するレポートの作成に関しても自身の論すべき内容が担当の先生に対して論理的に伝わるように、そしてレポートとしてふさわしい書体であるように注意して書くであろう。会話や会話体のことばで書かれたもの（携帯メール、ツイッターの類）はその場に合った形式（たとえば、友達同士で話す際に使うようなくだけた会話体）で表現され、たいていその場で消えてしまうが、書かれたものは活字として半永久的に残る。特に、先述の手紙、レポートはその代表例である。ここではその「書き言葉」を使って「書く」ということに焦点を定めて、英語で「書く」ためにはどうしたらよいかを自身のこれまでの教育経験をもとに論じたい。

ここでまた日本語をもとに考えてみることにする。先述の恩師への手紙を例にとると、まずどのように書き進めていくべきか、ということが最初の問題として起こる。たいてい「前略」ではじめて、その後に伝えたい内容を書き、最後に「草々」を加える、といったようにある程度形式が決まっている。英語にしてもその形式がある。しかし、日本語ならば母語なので、文法は生来理解していて、さらに標準的な表現も理解しているので、手紙における特殊な形式と表現（「前略」や「草々」にあたる）を改めて理解して用いるだけでよい。しかし、英語の場合はその「文法」や「表現・語法」を正しく扱うといった余計な問題が加わる。我々はまず英語の「構造」を理解しなくては英語で表現することができない。会話では時に単語の羅列で意思疎通を行うことができる場合がある。しかし、手紙などの書かれたものの中では、単語のみの表現では相手に意図が伝わりづらい。

英語の構造がどのようなものであるかについての内容は基本的に中学・高校時代の英語学修に集約されている。故に我々は英語との付き合いが短くないはずである。英語の基本構造は「5文型」

といわれる文の形式にほぼ分類できる。多少の変形した英文もその5文型をもとにして考えれば、構造上での理解が可能である。英語で「書く」ための第一段階のチェックとしてまず5文型について（再）確認しておきたい。その類型を以下に示す。

文型	形式の要素と例文
第1文型	主語[S] + 動詞[V] <div>Taro goes to the station.</div> <div>S + V + (M)</div>
第2文型	主語[S] + 動詞[V] + 補語[C] <div>Jiro is a college student.</div> <div>S + V + C</div>
第3文型	主語[S] + 動詞[V] + 直接目的語[DO] <div>Hanako took the last bus yesterday.</div> <div>S + V + O + (M)</div>
第4文型	主語[S] + 動詞[V] + 間接目的語[IO] + 直接目的語[DO] <div>Hanako made Taro a birthday cake.</div> <div>S + V + IO + DO</div>
第5文型	主語[S] + 動詞[V] + 直接目的語[DO] + 補語[C] <div>Jiro named his cat Konatsu.</div> <div>S + V + DO + C</div>

上記の表を見て最初に気がつくことは5つすべての文型に主語（Subject）と動詞（Verb）が存在し、しかもその2つが文の始めのほうにきているということである。正確に言えば、必ずしも主語と動詞がこのように文の始めのほう（文頭）にあるわけではなく、付属的な要素がその文頭を埋めてしまう場合がある。それは「副詞（Modifier）的要素」と呼ばれるもので、これは文全体に関わる説明を補足したり、動詞に関する説明を補足したりする役割を担う。副詞の形態としては語尾に-lyがつくもの（例：Suddenly「突然に」＊同様の形態でも形容詞などの意味を持つ例外がある。例：friendly「友好的な」）やinなどの「前置詞（Preposition）」と「名詞（Noun）」の組み合わせ（例：in Tokyo「東京で」）といったものがある。上記のほかにも例外があるにせよ、英語の文章で最も重要な要素は主語と動詞である。よって、文中の特に文頭にあると思われるその2つの要素をすばやく見つけ出すことが英語を「読む」際には大切であり、翻って英語を「書く」際にも大切なのである。

では、主語と動詞の見つけ方であるが、これは「品詞（part of speech）」の判別ができなく

てはならない。まず、主語は必ず「名詞」「代名詞 (pronoun)」といった名詞相当の働きができる語、または「名詞句 (nominal phrase)」といった名詞を含む複合語の3つの要素でしかなりえない。名詞句とは、たとえばthis haunted house「このお化け屋敷」というように最初に指示詞 (demonstrative) のthisから始まり、形容詞 (adjective) のhaunted、そして最後に名詞のhouseを結びつけてひとつの名詞のまとまりとして機能する形態のものである。ここで取り上げた指示詞や形容詞、また冠詞といった要素は名詞句を形成するために重要な役割を果たすので、その役割を確認しておくことと文中における主語の部分を自分で組み立てることがより容易になるだろう。よって、すべての単語においてその意味だけでなく、品詞の分類上何に属するのか、どのような使い方ができるかという理解をしておく必要がある。

もう1つの重要な要素である「動詞」とは当然のごとく、動作・状態を表す語のことである。動詞の場合にはその意味、品詞情報に加えて、さらに必要な情報がある。それは動詞の「語法」である。ここで上記の表に目を移してみると、第1、2文型には出てこないが第3、4、5文型で出てくる記号があることに気づく。それは動詞の後に「目的語 (object)」があるかないかという違いだが、これは動詞の語法と大きな関係がある。目的語とは品詞でいうと名詞、代名詞などの名詞相当の語 (句) で構成される。これは主語と同じ構成である。では、主語と目的語は何がその違いを生み出すのか。それはその語 (句) が置かれている位置、すなわち語順である。代名詞ではその位置によって語形が変化するので、例えば、Heは主語として、himは目的語として用いられる。その形態によってその語が主語なのか目的語なのか判別しやすい。その代名詞の中でも主語の使い方をするものは動詞の前に位置し、目的語としての使用する場合は動詞の後に置かれる。動詞の語法ということに話を戻すと、動詞には「①目的語を必要としない動詞」と「②目的語を必要とする動詞」の2つに分類することができる。この分類は英語の構造を理解するために最も重要であり、さらにその後続く動詞に関する情報もあわせて理解しておくことが正しい英文を書く際には必要である。

最初の「①目的語を必要としない動詞」とは文法用語で「自動詞 (intransitive verb)」と呼ばれるものである。上記の表の第1文型の例で用いられているgoという動詞の後に続いている部分はtoという前置詞にthe stationという冠詞に名詞が続き、副詞句というまとまりを形成している。つまり、「駅へ」という副詞句は「行く」という動詞に対して「どこへ」行くのかという説明を補足している。ここで例に挙げたgoという動詞は、その語の直後に名詞相当のみの語 (句) が続くことはできない種類の動詞であることがわかる。故にHe goes the station.という文章が間違いであるのは以上の理由から導き出されるが、授業等で学生の英作文を添削すると、意外にもこの種の間違いが多い。後にも述べることになるが、よくわかっていると思われる基本的なことについても十分注意してケアレスミスをしないよう心がけるべきである。「①目的語を必要としない動詞」、すなわち自動詞には表中の第2文型にも用いられる。この英文での動詞の後には名詞相当語句が続いているので、例外と思われるかもしれない。この種類の文型で使われる動詞の後続くものは「補語 (complement)」と呼ばれるものであり、そこで使われる品詞は名詞、形容詞またはそれ

ら相当の語句である。表の例文では、動詞にisが用いられており、これはbe動詞である。be動詞の役割は「ある（主に第1文型に属するThere is ～という形式の文章で用いられる）、存在する」という意味のほかに「[主語]が[補語]である」という意味を持たせることである。すなわち、「[主語]=[補語]」の関係を作り出す役割を担うのがbe動詞である。すると、例文中では「Jiro [主語]=a college student [補語]」の関係となる。ここでいう補語とはその直前にある名詞相当の語（句）の説明を加える要素と考えるとわかりやすい。第2文型の場合はSVCなので、Cの前にある名詞的要素は主語のSである。主語と補語の本質自体は変わっていないという点がポイントである。この考え方は後の第5文型を考える際にも役立つ。また、The fish went bad.（「その魚は腐ってしまった。」）という文章も第2文型であるが、the fish=badという関係性が見て取ることができれば理解できる。ここでのgoは「[主語]を[補語]の状態に変化させる」という意味で用いているが、前述のようにbadになっているものはthe fish自体なのである。2文型で用いることのできる動詞にはこの他にどのようなものがあるかチェックしておくことで表現の幅が広がるはずである。

続いて残りの第3、4、5文型に関わる「②目的語を必要とする動詞」について確認しておく。この種で用いられる動詞は文法用語で「他動詞（transitive verb）」と呼ばれる。前述の自動詞との違いを一言で述べると、自動詞を含む文章では主語と動詞の関係のみ（自身）で大きな意味での文構造をまとめようとするが、他動詞を含む文章では動詞がその後の要素に主語とは違う他の働きかけをするということがある。この他動詞の作用に関する残りの3つの文型を理解することは大変重要であるため、これ以降、具体的に例を掲げながら説明していく。

まず、第3文型で用いられる動詞は他動詞の一般的な使い方を示しているので、ここで確認しておく。第3文型の特徴は前述のとおり、動詞の後に目的語を伴うという点である。目的語とは名詞相当の語（句）であり、表中の例文ではthe last busにあたる。これだけ見ると、第2文型の形と変わらないように思えるが大きな違いがある。それは、主語と目的語の関係である。第2文型の主語と補語は性質的に同じものであることはすでに述べたが、第3文型における主語と目的語ではそれぞれの性質が異なるのが普通である。例文中では主語がHanako（人）であり、目的語はthe last bus（物）である。動詞として用いられているものはtook（take）であり、ここでの意味は「[主語]が[目的語]に乗る」である。第3文型で用いられる動詞は主語が目的語に対して何かの働きかけをするという意味で用いられる。この種の動詞で代表的なものはmakeであろう。このmakeがこの第3文型で用いられる一般的な意味は「[主語]が[目的語]をつくる」である。このように第3文型の動詞は「[主語]が[目的語]を～する」という意味合いを持つことが非常に多い。この種の動詞の直後には必ず名詞相当の語（句）が続く。英語で「書く」際にはその認識が必要で、たとえば「議論する」という意味の動詞discussは第3文型で用いられるので、「[目的語]について議論する」と覚えておく必要がある。つい日本語に引きずられてWe discussed about the problem.としてしまう学生の文章を散見するが、注意したい。

第4文型は動詞の後の目的語を2つ備える点が特徴的である。目的語が2つということは名詞相

当語（句）が2つ存在するということである。同じ要素が文中にいくつも見られるときには特に語順がポイントになる。普通、英文では名詞相当の語（句）が続くことはない。特に動詞の直後にある2つの名詞相当語（句）にはそれぞれに決まった意味の役割が備わっている。その前にまず確認しておきたいことは、やはりここでも主語と目的語は性質の異なるものである。表の例文を用いると、主語はHanakoで最初の目的語がTaro、2つ目の目的語がa birthday cakeであり、すべて異なるものである。先程、語順が重要であると述べたが、第4文型における最初の目的語は「間接目的語 (indirect object)」、2つ目の目的語を「直接目的語 (direct object)」と呼び、これら2つの目的語はそれぞれの順序によりお互いの役割が決定する。文中における意味として、間接目的語は「～に」を表し、直接目的語は「～を」を表す。第3文型で表れた目的語は直接目的語（「～を」）である。この文章ではmade (make) という動詞を用いていて、すでに第3文型の代表として示したが、この動詞は第4文型でも用いることができる。その場合の意味は「[間接目的語]に[直接目的語]を作ってあげる」となる。つまり第4文型で用いることのできる動詞は、その後ろに2つの目的語（間接目的語をA、直接目的語をBとする）を伴い、「AにBを～する」という意味を作り上げる。この種の代表的な動詞はgiveであり、他の第4文型の動詞にgiveの意味を加えるとうまく意味が通る場合が多い。上記のmakeに関しても第3文型で用いた意味の「作る」にgiveの意味である「与える」を加えたものが「作ってあげる」である。また、これは第4文型の動詞として用いられるbuyも同様である。以下にその例を挙げる。He bought her a necklace.（「彼は彼女にネックレスを買ってあげた。」）このように動詞は文型によって意味が変化するので、日本語の意味だけでなく語法にも注意しなければ、その動詞を「使える」ことにはならないのである。

最後に第5文型である。この文型は少し複雑な構造になっている。形式としては動詞の後に目的語（「～を」）と補語を含んでいる。補語とは第2文型の説明の際に触れたが、直前の名詞相当語（句）の性質を補足説明する役割を持つものである。ここでは主語ではなく、目的語が直前の名詞相当語（句）であるので、そちらに属することになる。すると、表の例文においては、動詞の後に「his cat [目的語]=konatsu [補語]」という関係が成り立つ。また、動詞named(name)を第5文型の際には「[目的語]を[補語]と名づける」という意味で用いる。ここで注意したいことは第4文型と第5文型の違いである。表の例文では第4、5文型ともに動詞の後に名詞相当語（句）が2つ並んでいる。その見分け方はそれら2つの要素の性質を比べることである。第5文型では「his cat=Konatsu」という関係になっているが、第4文型では「Taro≠a birthday cake」という関係である。こうしたことを見極める際に、それぞれの動詞はどのような文型で用いることができるのかということをしてできるだけ理解しておくことが必要になってくる。すべての動詞に関して語法を覚えることはほぼ不可能である。しかし、日常生活で頻繁に用いる動詞の数は限られていて、その大半は中学生で習う単語である。それ故に基本的な単語をもう一度意味だけでなく、語法という点からも確認することが大切である。特に、この章でのテーマである英語を「書く」作業では重要なポイントである。

文章を書く際には、文の構造に注意を払うと同時に様々なミスをしないう心がけなければならない。そのミスというのはケアレスミスである場合が多いが、ここではどのようなことに気をつければよいかという点をいくつか示してみたい。まず、英語で文章を書く際にはできるだけシンプルに書くことを勧める。日本語でも同様だが、簡単に述べればよいところを回りくどい表現で長々と書いた挙句、結局何を述べたいのか読み手に伝わらないということがある。簡潔に述べるということは相手に意図を理解してもらうために最も大切なことである。英語でそれを実践するためには、基本的な英単語、構文をできる限り利用して書くのが効果的である。今回は関係代名詞の用法など、応用的な用法に関しては触れなかったが、まずは基本を見直し、比較的やさしいと思われるパターンを用いて英語を「書く」練習をすることを勧めたい。ここで示した構文をもとにして作文するだけでもかなりの情報を組み込むことができるはずである。また、英作文におけるケアレスミスの原因で代表的なことを2つあげておく。1つ目は名詞に関わることで、「数」の問題である。数えられる名詞の単数形の直前にはa、anを、同様に複数形ならば、名詞の直後に-sをつけることは当たり前であるが、学生の英作文を添削すると意外にこの種の間違いが多い。これは、日本語にそのような概念がないことが起因していると考えられるが、英語で名詞を扱う際には常に注意しておきたいことである。2つ目は動詞に関わることで、3人称単数が主語にある際の動詞の変形(-s)、また動詞の時制についてである。最初の3人称単数が主語にある際の現在動詞の変形は先述の名詞の数に関することに同様であるが、動詞に関しても数によって現在形では形が変わるのは当たり前である。しかし、これについても間違える場面が散見される。ここで当たり前と述べたのは、上記の文法事項は英語を習い始めて、かなり初期に学ぶことでありながら、それ以降も英語を「読む」上ではなんら問題を感じないにも関わらず、英語で「書く」という際に非常に見落とすことの多いポイントなのである。動詞の時制選択についても、過去・現在・未来の各時制に対応して動詞の形を変えろという基本的なことを学生自らが英語で「発信」する際には間違えることが多い。英語における間違いについて、こと細かく言えばきりががない。ネイティブ・スピーカーでないといわれない、またはそういった人でもわからない内容があるほど、英語は多様化しているともいえる。しかし、英語を用いることのできる人々において、一般的に通じる英語はまさに学校で教えられている英語である。これまで学んできた英語をさらに磨くことで誰にでも伝わる英語で表現することができる。故に、当たり前であると思われる基本的な事柄をもう一度(再)確認してみるだけでも自身の英語が大幅に洗練されるであろう。

「書く力」(ライティング能力)は一朝一夕には向上しないが、これまでに述べてきた注意点を常に意識して実際に「書く」ことを続けることによって、正確な英語の表現力を身につけることは可能であろう。そして、何より正しい英語でないと正しい知識は得られない。また、正しい英語を世界の人々に発信することで、そして異なる文化の人々との交流の中で自身の知見はより一層広がる。英語で「書く」ことを通じて、英語ということばについていろいろと考え、最終的に自身の可能性を広げる一助となることを願う。